

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 田中 将裕

論 文 題 目

施設入所高齢者における implicit memory を介した刺激による
食事認識の変化

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 鈴木 國文

名古屋大学教授 辛島 千恵子

名古屋大学教授 寶珠山 稔

論文審査の結果の要旨

【背景と目的】認知症高齢者において潜在記憶や非陳述記憶と呼ばれる海馬非依存性記憶の **implicit memory** は比較的に保たれる傾向があると報告されている。特に、介護老人保健施設への入所が必要となる中等度から高度の認知症を有する高齢者に対しては、介入手法が限られることから、**implicit memory** が有効な介入の糸口として用いる報告がなされている。本研究では、この点に着目し、施設入所中の認知症高齢者を対象として残存した **implicit memory** を介して中心的日常生活活動のひとつである食事に関する認識を改善することを目的とした。

【方法】介護老人保健施設入所中の認知症高齢者のうち、「この食事が何食か」という食事に関する認識が障害されている利用者を対象とした。高度の難聴や口頭でのコミュニケーションに障害のある例は除外し、20名（男性6名、女性14名、平均年齢：86.0±5.9歳）の参加を得た。昼食時に、昼食の想起を想定した聴覚（食事テーブル周辺に限った明るい音楽）および視覚的刺激（明るい色のテーブルクロスと造花）を付加した固有空間を設定し、条件刺激の無い3日間の対照期間に続き、視覚刺激を加えた3日間と視覚に聴覚刺激を加えた3日間を無作為な順序で設定し、食事認識の変化を口頭質問により観察した。

【結果】刺激の無い対照期間と比較して、視覚刺激を付加した期間および視覚と聴覚刺激を付加した期間で食事認識は有意に高かった。さらに、視覚と聴覚刺激を付加した期間は視覚刺激のみを付加した期間より食事認識が高かった。食事認識の変化は昼食時にのみ認められ、他の食事や食前後の時間には変化が認められなかった。3日間内の正答率は条件期間においても、初日、2日目、3日目の正答率に有意な差は認められなかった。

【主な知見】1) 昼食の認識が障害される程度の中等度以上の認知症高齢者において **implicit memory** を介する介入が有効であった。2) 刺激による食事認識の改善は即時的であり学習効果や持続性は認められなかった。3) 刺激の種類（modality）を増やすことで食事認識はより改善した。これらの点は、認知症高齢者の想起および認知機能を考える上で有用な基礎的知見となると考えられた。また、**Implicit memory** に働きかける介入は刺激が複雑になる傾向があるものの、本研究で用いた条件刺激は簡便であり、実際の施設運営を念頭に置いた介入であった点でも評価された。

【新知見と意義】本研究で得られた重要な新知見は、1) 中等度以上の認知症高齢者でも潜在記憶に働きかける環境調整で日常生活の認知機能の賦活が可能である点、2) 簡便で実際の施設で取り入れることのできる刺激手法で認知機能改善が得られた点、にある。認知症高齢者への介入のうち訓練的要素を含むものはその実施と効果に限界がある。本研究では、介入効果の持続性は認められなかったものの、学習期間が不要で即時的効果が得られた結果は、他の介入方法への応用や結果の解釈に新たな視点を提供するものと考えられた。認知症高齢者の記憶や認識に関する残存機能は明らかではない点が多く、中等度以上の認知症高齢者の記憶や想起機能へのアプローチを考える上でも有用な知見と評価された。

以上より、本研究は博士（リハビリテーション療法学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。